氏名：川口御生
所属：人文学部法経政策学科　３年
派遣先：ガジャマダ大学　２０１５年９月１９日～２０１５年１０月４日

・日本語教室について
１．クラス分け
・授業は月～金までの週５日、各日午前の部：１０：００～１１：３０、午後の部：１３：３０～１５：００に分けて行った。
・学生の日本語の習熟度には開きがあり、ネイティブのように会話できる学生から、勉強を始めたばかりの学生まで様々だった。
・ガジャマダ大学に留学している立命館大学の学生の方が、日本語クラスの運営を手伝ってくれたため、毎回の授業でアドバンスクラスとベーシッククラスに分けて授業を行うことができた。（３回ほどクラス全員の授業をした。）
２．指導内容
・私が受け持ったのは主にベーシッククラスの学生。日本から持ってきた英語のライティングの教科書をヒントに授業を考えた。
・助動詞（can,should,have to,）、Would you～？、Can you～？、I’m sorry～（謝罪の表現…ごめんなさい、すみません)、予定（be going to～)、比較（He is taller than she.）受け身（Rock festival will be held tomorrow.）間接疑問文、命令文
・授業の進め方
１．前回習った文の復習→日本語に訳せるか確認する
２．質問やリクエストがないか生徒に聞く。リクエストされた文を日本語に訳し、皆で発音する。
３．復習の後、その日に習う表現を用いた文を書く、解説する、復唱する
４．日本語に訳してほしい文があるか呼びかける。３を繰り返す。
５．その日に習った構文を実際に使った会話文を考え、ロールプレイングを行う
日によって進捗状況が異なるため、時間を見て柔軟に対応した。
・なるべく全員がノートを書き終えるまで待ち、皆がついてこられるようにした。
・例文はなるべく身近なものを使って作るようにした。例えば比較の構文では代名詞ではなく自分の名前を用いたりした。文がどのようなシーンで使われるかも合わせて説明した。
・授業では生徒にリクエストや質問を聞き、生徒が知りたい日本語の文を教えることに注力した。
＜アドバンスクラス＞
・２、３回ほど受け持ったが、その時は日本の冬の過ごし方、歌の歌詞を訳す、日本のお金について教えた。
冬の過ごし方…冬の遊び（雪合戦、スノーボード)、冬の服装、食べ物、イベントについて

・レミオロメンの３月９日を英訳しつつ、意味を教えたりした。この曲は卒業シーズンの曲だったので、日本の卒業式や一年間の学校行事などについても教えた。
・日本のお金の種類、書かれている人物、人物にまつわる話、食事にかかる金額等を教えた。

＊日本語クラス以外での活動
　平日はご飯に連れて行ってくれたり、友達の家に皆で遊びに行ったり、日本語クラスの皆の生活に混ぜてもらっていた。インドネシアのホラー映画を友達の家で見たのですが、お化けも国によって違うのか！と、はっとさせられた。
　また、行きたいところ、食べたいものを尋ねてくれ、私の希望が叶うよう予定を調整してくれた。日本語クラスの皆には感謝してもしきれない。移動は基本的にはバイクである。後ろに乗せてもらいジョグジャカルタの街並みを見るのはとても新鮮で、貴重な体験だった。
　土日はボロブドゥールやプランバナンといった観光地にも連れて行ってくれた。日本人が来るたびに案内をしてくれている学生は１か月に４回もボロブドゥールに行ってくれたようで…申し訳ないと思いながらも甘えさせてもらった。皆優しく接してくれたので、「さみしい」と感じたことは一度もなかった。
　バンド練習を見学させてもらったこと、学内を案内してもらったこと、ホームステイさせてもらったこと…沢山の思い出ができ、充実した２週間だった。

＊感想

私がくる以前に来た学生が沢山のことを教えてくれていたので、想像以上に進んだ内容を教えなければいけなかったこと、自分の英語力が乏しかったことなどから、日本語クラスの運営は当初大変だった。特に臨機応変に対応することが難しかった。授業がすんなり終わって時間が余ったり、質問やリクエストが多く思うように授業が進まなかったり、想定外のことのほうが多かった。準備も大切だが、それだけに固執してしまうのではなく、その場での柔軟な対応というのも大切なのだと感じた。

放課後は皆の日常に混ぜてもらい、いつもインドネシア人の友人たちと一緒に過ごしていたので、現地の人の暮らしや習慣を自分の目で見て確かめることができた。朝早く起きてお祈りをしていたり、時間通りに集まらなかったり(笑)全てが新鮮で、毎日沢山の発見があった。

行く前は英語だけノリで話せれば何とかなると思っていたが、インドネシア語を少しでもいいので話そうとすることが距離を縮める一助になるのだと感じた。結局、帰るまでに「ありがとう」「ごめんなさい」といった基本的な言葉しか覚えられなかったが、日本語クラスの皆だけでなく、お店の人、空港の人にもインドネシア語であいさつすると笑顔で答えてくれるのがとても嬉しくて、滞在期間の最後のほうはインドネシア語を使うよう心掛けた。

このプログラムを通してインドネシア人の友達、ＵＧＭに留学している日本人の友人と出会えて本当に良かったと思っている。素晴らしい体験ができたのも、現地で私をサポートしてくれたインドネシアの友人、国際交流室の方々、家族、関わってくれた皆さんのおかげである。この場を借りて感謝を伝えたい。

＊今後の展望

今回インドネシアで日本語を教えるなかで、日本について知らないことが沢山あるのだと思った。日本と違う文化を見て体感し、「なぜ日本と違うのか」といった疑問がわいた。残された学生生活は１年半だが、風土や暮らし、そのルーツなど、もっとたくさん勉強していきたいと思いった。

加えて英語の勉強をしたいと思った。私は英語がうまく話せないままインドネシアに行ったが、日本語クラスの学生には５か国語話せる学生もいた。自分の境地の狭さと、共通言語としての英語さえも自分のスキルになっていないことにとても恥ずかしくなった。英語ができれば、異国の人とも話ができる。これは本当に素晴らしいことなのだとインドネシアに行って再確認した。英語の勉強に取り組み、自分のスキルとして使えるよう頑張りたい。